

2007年度修士論文要旨

1. 上月 富佐子

ドイツ民衆文学（伝承話）と日本の民衆文学（落語）
との接点
——「笑い」のモチーフから——

1. テーマ設定の理由と分析方法

「笑い」は洋の東西を問わず、時代、国を超えてあらゆる文化圏に見られる。帰属文化による「笑い」の相違は、比較文化研究の一つとして研究されている。そこで本研究では更に掘下げ、異なる文化間における「笑い」の類似モチーフの有無、相違点、独自性、共通性等を分析した。その分析に際しては、ドイツの幾つかの民衆文学（伝承話）と日本の伝承笑話芸の「落語」とを、「笑い」の観点で検証した。

検証対象のドイツ民衆文学テキストは、『冗談とまじめ』、『ティル・オイレンシュピーゲル』、『ミュンヒハウゼンの愉快な冒険』、そして伝承要素の多い『グリム童話』の4テキストである。その検証は、「笑い」のモチーフの視点で、主に以下の順で進めた。その際、グリムメルヘン KHM44「名付け親の死神（Der Gevatter Tod）」と落語「死神」との関連性についても検討を試みた。

- (1) ドイツ民衆文学と落語との類似モチーフ分析
- (2) グリムメルヘンと落語との類似モチーフ分析
- (3) グリムメルヘン KHM44「名付け親の死神」と落語「死神」の関連性

2. 分析結果とまとめ

(1) ドイツ民衆文学と「落語」との類似モチーフ分析

ドイツ民衆文学と「落語」との比較では、多くの「笑い」の類似モチーフが見られた。分析例にあげた「問答」モチーフ話は異なる宗教を背景に持つが、双方の話の酷似には驚かされる。「笑い」は、社会や文化の相違により表現に多少の違いはあるものの、洋の東西に

個別に、あるいは同時期に発生していたこと、また社会や文化が異なっても「笑い」に対する民衆の思いには余り相違がないことが分かった。その伝承話の「笑い」には、いずれの時代、国においても、人々の「願い」、「代弁」、「抵抗」、「鬱憤のはけ口」等が込められていたと推測される。

(2) グリメルヘンと落語との類似モチーフ分析

「笑い」の観点でグリメルヘンを読むと、その半数近くが「笑い話」的内容であった。そして、それらを「落語」と比較してみると、そこには多くの類似モチーフが見られた。分析例として取り上げた「言葉の取り違え」や「神様の御利益」のモチーフは、どの国においても「笑い話」によく登場する。更に、類似モチーフだけではなく、帰属文化による独自モチーフ、関係モチーフ等についても検証した。

(3) グリメルヘン KHM44「名付け親の死神」と落語「死神」の関連性

① 落語「死神」の成立の過程

明治期の三遊亭円朝作とされる落語「死神」に登場する「死神」の概念は、ヨーロッパのものである。その元話は、「死神」モチーフを持つグリメルヘン KHM44の「名付け親の死神 (Der Gevatter Tod)」と推測される。当時、文久遣欧使節団の一員であり、円朝と親しくしていた人物に福地源一郎がいる。この福地がベルリンでヤーコプ・グリムを訪問し、ヤーコプから聞いた「死神」話を円朝に話したのではないかと推測されるが、その確証はない。

② グリメルヘン KHM44「Der Gevatter Tod」と落語「死神」との比較

グリメルヘン KHM44では、「名付け親」の選択過程は「神」、「悪魔」、「死神」の3段階を経ている。最後に死神が貧富の別なく公平に人間を連れ去ることで「名付け親」に選ばれる。ここに、権威に懐疑的で神に対して批判的で不信心を持つ人間像が見える。一方、落語ではこの選択過程はなく「死神」のみである。また、グリメルヘンにおける医者仕立ての方法や治療方法に、ドイツの論理性や説得性が感じられるが、「落語」では怪しげな呪いの治療で、それが「笑い」のモチーフとなっている。

③ 口頭伝承話としての落語「死神」の意義と今後の課題

ドイツの民衆文学と「落語」の双方に、多くの「笑い」のモチーフの存在が検証できたことは、ドイツ人の「落語」の受容可能性を示唆するものである。「口承文化」であったドイツメルヘンがグリム兄弟の編集により「文字の文化」となった。その「名付け親の死神」が、ドイツから遠く離れた日本において、今なお「口承伝承話芸」として語り継がれているのは、文化事象としても興味深いことである。この落語から、狂言、オペラ、映画等も生まれた。

とはいうものの、異なる文化圏での「笑い」の共有は、そう簡単なことではない。そこで、「笑い」の共有の材料の一つとして、「グリム童話落語」を試みることは有効と考える。それには、まずはドイツ人の「笑い」の更なる分析が必要である。

2. 高木 宣幸

タツィアーンとルター聖書における接続法の比較研究

0. 序

本論では Tatian (825年頃) と Lutherbibel (1546年版) における接続法を比較し、その違いを考察する。資料はルカによる福音書に限定する。

1. 動詞形態論

本節では動詞の形態がどの程度 Modus (直説法と接続法) を区別しているかを考察する。古高ドイツ語一般については以下のことが言える。

強変化動詞：現在形、過去形ともすべての人称・数において区別できる。

弱変化動詞

現在形：第1類 (-en 型) 1 人称複数以外、区別が可能

第2類 (-ōn 型) 2 人称単数・複数および1 人称複数の一部で区別がない

第3類 (-ēn 型) 1 人称複数、2 人称単数・複数で区別がない

過去形：第1類・第2類 すべての語形で区別がある

第3類 2・3人称単数で区別がない

ルターに関しては工藤康弘「ルター聖書における接続法の形態論的考察」筑波ドイツ文学研究 第2号（1984）73ページに基づき、Modusの識別が可能なものを挙げる。

現在形

1人称単数：過去現在動詞、sein、wollen

2人称単数：I類とIII-a類を除く強変化動詞、過去現在動詞、
sein、haben、wollen

3人称単数：すべての動詞

1・3人称複数：sein

過去形

1・3人称単数：強変化I、II、III、VI、VII、sollenを除く過去
現在動詞、sein、haben

2人称単数とすべての複数形：強変化II、III、VI、sollenを除く
過去現在動詞、sein、haben

古高ドイツ語に比べて母音が弱化して動詞の形態が乏しいルター聖書では、直説法と接続法の区別ができない modusambivalent な語形が多い。

2. Tatianにおける接続法の用法

Tatianにおける接続法の語形は177個あり、その用法を頻度の大きい順に挙げると以下のとおりである（かっこ内は数）。目的（46）、間接話法（37）、要求（36）、命令を示す主文に従属する副文（26）、否定（18）、非現実話法（5）、比較（5）、可能性（2）、勸奨法（Adhortativ）（2）

3. TatianとLutherbibelの比較

ここではTatianが接続法を用いている箇所に対して、Lutherbibelがどう対応しているかという視点から見ていく。目的に関してルターは接続法だけでなく、直説法、話法の助動詞、zu不定詞なども用いている。間接話法、否定、比較に関してLutherbibelは構文の違いが目立つ。要求に関してはルターがsollenを多用する点で、Tatianと異なっている。同じく勸奨法に対してルターはLasset uns…を用いており、もはや接続

法単独による用法はない。命令を示す主文に従属する副文は、Lutherbibel ではもはや接続法が現れる環境ではなくなっている。

4. 時制の一致

Tatian において、主文と副文の時制がどの程度一致しているかを調べた。対象となるのは目的・間接話法・否定・比較を表す文および命令を示す主文に従属する副文のうち、主文と副文双方に定動詞がそろっているものである。その結果、多くの文で現在形主文のあとには現在形（＝接続法 1 式）、過去形主文のあとには過去形（＝接続法 2 式）が現れることから、時制の一致が概ね守られていると言える。

5. まとめ

現代語に比べ、Tatian、Lutherbibel とともに接続法がよく用いられ、時制の一致があるなど、共通点が見られる。他方、その用法を見てみると、両者が一致するケースは全体の三分の一以下であり、言語的な変遷が見て取れる。